

月刊

アジアの友

MONTHLY The Asia-no Tomo

3

MARCH

2010

2009 留学生文学賞受賞作決定



ABK日本語コース 09年度修了式

(2010年3月3日 文京シビックホール)



おめでとう。でもこれからが本番です！

月刊 アジアの友

2010年3月号 第483号

目次

- 2 巻頭
2009 留学生文学賞受賞作決定
奨励作品受賞作「再会」クリコフ マキシム
- 13 連載紀行文
写真家・鎌澤久也の メコンのほとりで・・・(最終回)
「最初の一雫」
- 15 私の意見・私の体験
「これが人生」 劉 思傑 ～中国(香港)
- 16 ABK 日本語学校生リレーインタビュー
わたしたち・・・だから日本に留学しました⑦
申 知芮さん ～韓国
- 18 知友会通信 奨学金・イベント情報

<表紙作品>

旅先で出会った少女。(ラタナキリ / カンボジア)

by 中林響子 (Ms.Kyoko NAKABAYASHI)

2009留学生文学賞受賞作決定

2009年で7回目を迎えた留学生文学賞の受賞作が決定しました。今回は大賞該当作品はなしという少々寂しい結果に終わってしまいましたが、応募作は史上最多の133作品にもほり、本プログラムに対する留学生の関心の高さがうかがえました。今回本誌では、選考委員である栖原暁・東京大学留学生センター教授の、表彰式でのご挨拶と奨励作品賞を受賞した作品の中から、クリコフ マキシムさん（ロシア）の「再会」をご紹介します。

＜栖原教授のお話＞ 今回は2009年の4月、留学生を100人以上受け入れている大学や留学生会館にポスターを貼りました。そして去年の10月末で締め切りにしました。途中でシリ・ネザマフィさんというイランの第5回の受賞者が、芥川賞の候補にノミネートされて、外国人ということで新聞も一斉に取り上げ、その影響もあってか、126人から計133作品が届きました。

内訳別では、今回は小説が56と一番多かった。前回は35だった。詩は少し減って30から24に、エッセイは40から44に増え、不明

なものが9件ありました。

国で見ると20か国、前回は16か国、その前年が13か国と、年々数も、出身国も増えてきています。大学も北は北海道から南は沖縄まで、さまざまな大学や教育機関に在籍する学生達からの応募がありました。

11月に予備選考を行い、近くの選考委員、ボランティアなどで全部読みまして、小説が10、詩が5、エッセイが1の16作品に絞りました。1月に選考委員で最終選考して、奨励作品賞7作品を選びました。残念ながら今回は大賞はありませんでした。

2009年 留学生文学賞 受賞作品

★大賞 該当作品なし

★奨励作品賞

小説「再会」 クリコフ マキシム （ロシア・男・東京芸大）

小説「古い鉄砲の欠片（かけら）」バットトルガ ナイラムダル（モンゴル・男・神戸大）

★CASA賞

小説「母と娘のゴールデン街」金 珉廷 （韓国・女・東京外語大）

小説「明日、晴れ」張 秉洵 （中国・男・広島経済大）

小説「月光」レファンバオカン （ベトナム・女・関西学院大）

詩3編「新緑」「汽車」「白いセーター」周 韻 （中国・女・東京大）

★檸檬屋賞

詩3編「旦那へ」「ただいま」「色節」ベーク テオドーラ（ハンガリー・女・沖縄県立芸大）

2009年留学生文学賞奨励作品賞受賞作

再 会

—完全なる幻想短編小説 まったくの非政治的ストーリー—

クリコフ マキシム

…ヨンジュウウ・ハッチ…ヨンジュウウ・
キュウウ・いいよいしょ・ゴジュウ!

五十! できた!

マカーロフは緊張を解きほぐすように息を
ふーっと吐きだして、床にばたりと突っ伏し
た。

汗びっしょりになって、額からは大粒の汗
がしたたり落ちている。

あっつ! あっつ! 東京はあっついな!

特等室の窓という窓を開け放っていたが、
せっかく吊るした風鈴も8月中旬ともなると
ばててしまったのか、深い眠りについたかの
ように微動だにしない。その代わり、外の庭
に遊ぶ油蟬の「じいじい」は、壊れたラジオ
のように、外務大臣の神経を逆なでんばかり
だが、そうはさせない。一大国の外務大臣と
もなれば、神経は図太い。

腕立て伏せ50回。マカーロフの日課だ。2
週間前まで49回だったが、誕生日パーティー
の翌日から一回増やした。そう、マカーロフ
外相は50代に突入したのだ…

しばらくそのまま横たわって、汗の粒が豪
華な床板に流れ落ちるのを感じていた。クー
ラーがついていない。マカーロフは、学生の
時代で初めて冷房と出会い、そのせいで真夏
に風邪を引いてしまってからというもの、ずっ

と冷房が苦手で、いまだに慣れない。

暑い日には、暑さの中を…

誕生日のパーティーはモスクワの郊外に建
てられた豪華な別荘で開かれた。外交官、政
治関係者のほか、マカーロフ本人が全く知ら
ない来客もだいぶあった。夜11時前だった
だろうか、作り笑いがすっかり硬直して、も
う表情を変えられなくなったころ、突然総理
が現れた。マカーロフは総理と2人で2階に
上がり、櫛の間に入ると、

「おめでとう!」と言って総理は思い切り（や
や強く）マカーロフの肩を叩いた。

「おめでとう。ついに50歳か、本当に若く
みえるね、お前は。今年は大切な年になるぞ。



※まあ、厳密に言えば、ほんの少し、政治的な色合いがあるように映るかもしれない。でも本当にほんの少し…

本当だ、よく覚えておきなさい、今年って年を。
2015年をな」

「はい。」総理が来ると思っていなかったマ
カーロフ。

「ところでお前は最後に日本へ行ったのはい
つだった？」

「2012年11月6日です」

「それじゃ3年ぶりだな、ひさしぶり日本へ
行ってみないか！」と言って総理はもう一度
思い切り（…やや痛く）マカーロフの肩を叩
いて部屋の外へ出た。

翌朝から外務省内はあわただしく動き始め
た。

長い間続いていた韓国と北朝鮮の間の交渉
がようやく合意に達し、2週間後に迫った9
月に統一協定が調印される可能性が囁かれて
いた。もしそうなれば、おそらく西東ドイツ
統一以上に歴史的な出来事であり、全世界に
影響を与えるに違いない。そのような状況
の中で、日露間の北方領土問題は依然解決
せず、平和条約も結ばれていないということ
、両国にとっても懸案事項であった。そこで
韓国と北朝鮮の統一協定が結ばれる前に、
北方領土問題を解決し、日露平和条約を結
ぶようにという大統領命令が外務省に下され
た。その条約締結の調整という大役がマカー
ロフ外相の50歳最初の誕生日プレゼントと
なってしまう…。

「日本へ行ってみないか！」

マカーロフはやっと床から立ち上がって
シャワーに入った。

「もう来てるぞ！」

じいじいじいじいじいじいじい…

日露平和条約締結のための事前協議を急
ピッチで終わると、外相を団長とするロシア
代表団は昨日無事に成田に到着した。時差
ぼけと日本の猛暑に適応するための時間は一
日しかない。今日は、逗子市近郊のプライ
ベート・ヴィラで条約締結に向けた最終協
議が行われる。

時差ボケにも、夏バテにも、油断にも、
悩みに負けない、マカーロフ。

しかし、この状況で彼の強靱な神経も極
度に緊張していた。蟬の声にいつもとは違
う反応を示す。

「じいじいじい」

シャワーの中のマカーロフは、まるで音
叉のように心身を振動させていた。それほど
までに緊張が高まってしまったのは、勿論
今回の使命の重大さもあっただろうが、そ
の他にもう一つ、日本側の団長が誰だか分
からないままだったということ。一週間前、
東京からの連絡で、マカーロフが個人的に
よく知っていた日本側の外相が急に入院し
てしまったという。そこで、まだ就任して
日が浅い外務次官が、日本代表団を率いる
ことになったと。

一体誰なんだろう？

この一週間懸命に行われた調査の結果は
ゼロに近い…。女性。40歳（若いな！）。
北海道海子（きたみちうみこ）。職歴そ
の他の情報はない。不測の事態によりロ
シア外務省では動揺も見られたが、マカー
ロフは遅滞なく「了解しました」という返
事を日本側に送った。

「じいじいじい」の音色が少し変わった。
倍音が一つ抜けたか、それとも新しい要素
が加

わったか。うまいのど歌のように聞こえてきた。低いベース音の上に、非常に高い、鈴の音がはっきりと聞えた。

あ、電話だ！やばい！時間だ！行かなきゃ！

敷地の奥まで進むと、広がった砂利道が段々細くなって、竹藪の中で完全になくなった。代わって美しい苔のなかに、ところどころ様々な形の飛石が敷かれている。ロシア代表团と日本人外交官たちからなる列がばらばらになっていく。石と石の間が広がったため、無表情のままかしまって規則正しいテンポでは進めなくなってきた。マカーロフは、石から石へ飛び移る仲間たちを、ニコニコしながら眺めていた。自分の飛び上がる姿も含めて。彼の緊張した心身は踊りを求めていたようだ。

青々とした竹と苔、飛石は次第に広大な庭へと繋がっていった。その空間の中心に様々な草花にうずまっている立派な洋風の屋敷。ドアが客を招きいれようとするかのように広く開かれており、両側に出迎えの人々が並んでいる。ロシア代表团が再び列を戻す際に、マカーロフは日本の団長を探してみた。

（あれ？ 男性ばかりだ！ おかしいな。あ、あ、いた、いた！）

ドアから着物を着た女性の姿が現れてきた。

（ちっちゃい！）

確かに、北道の背は高くなかった。ロシア・日本の兩代表团が対面の形をとる。

「わたくしども…まして…まことに…ごさいます…こころより…」通訳も同行しているが、東大に留学経験のあるマカーロフが話す完璧な日本語に、日本人の外交官はすっかり慣れているので、もうお世辞も言ってくれないし、

「すごい」という表情もみせてはくれない。

互いに建前を言い合いながら、観察する。彼女の目のやや下に視線を向けると、全体を把握することができる。マカーロフの中で、少なくとも「外相」「男」「人間」としてのそれぞれの自分が同時に彼女の情報を収集している。しかし北道はまっすぐ彼の目の中を見ている。そして、ニコニコしていない。ちっとも。

（危ない！ 本格的な武士の娘だ！ 100 パーセント。じゃ、今日は冗談やめておこう！）

挨拶の流れは自然につきて、北道は手招きした。団長の2人、つづいて各代表団員が建物の中に入った。

全員が上がってきた3階の大広間は、白を基調とした内装で、大きい鏡が沢山ついている、なかなか珍しいスタイルだ、とマカーロフは感じていた。2つの代表団員は長いテーブルに向かい合って席に着いた。しばらくの間、椅子の動く音、咳をして喉を整える音が聞こえる。それに続いて、いよいよ有名な外交の立役者、「間」。

そう、これだ。

< 間 >

この「間」を破る担当者は、深呼吸をし、口を開けた（たしか、その瞬間だった）。突然、静寂と同時に、極めてはっきりとした北道の声が響いた。

「みなさま。すみませんが庭へ戻ってもらえないでしょうか。マカーロフ外相と2人でご相談したいことがございます。勿論、マカーロフ外相にご了承頂ける範囲で、ですが」

参加者らの囁き声の中で、再び、彼女が発した。

「どうぞよろしく願い申し上げます！」

「諸君！聞いたか？ さ、庭の方へ！」

マカーロフは、「賛成！」の意思を明言し忘れ、自分の仲間以外に行くようにとだけロシア語で命令をした。再びみんなの椅子が動く音。紳士たちは鏡の間から切れ目なく出て行った。その動きはまるで脱走のようにも見えた。

「マカー、マカー、マッカーサーちゃん！外相！大丈夫？ 今日のはちゃんと頭が回転してる？」と、マカーロフの後ろから仲のいい同僚のささやきが聞こえる。

「大丈夫か小丈夫かどうかなんて、大きなお世話だ！行ってる！」

やっとドアが外から閉められた。

よく考えるとここは本当に鏡が多い。そしてそれぞれ鏡は別々の方向を向いている。とマカーロフは気づいた。正面に座っている北道の左右に、2 人のマカーロフが座っているのが見える。

「こちらのホールは面白いでしょう。録音機、カメラ、などの装置はありません。少なくとも、私が知っている範囲では」

「そうですか。それはありがたい」

そう言ってマカーロフは、外務大臣の立場から離れて、まっすぐに相手の目の中を見てみた。目がすごく笑っている!!! 2 人は互いの目を見合っていた。これまでに体験したことのない、外交辞令の応酬、バトル…

でも、バトルかな？「たしかに、ほとんど変わらないね。ニキータさん」

(へ?)

「すみません？ ちょっと今聞き逃したみたいで、もう一度お願いできますでしょうか？」

「あまり変わらないけど、毎日新ニキータになるって。今もそう？」

「すみません、すみません、えええ…」

彼女の言葉に虚をつかれてしまったマカーロフは、会話の中で敬語もなくなったことになかなか気づかない。

「すみません、本当に何の話か分かりませんが…」

北道は突然笑い出した。心から自然的に。とても嬉しそうに。

『『一期一会』でしょ？ ニキータさん。それとも、あなたは言ってたように『二期一会』？』
(じいじいじい…じいじい…じい…)

強靱な糸が緩んできた。ニキータ・マカーロフは状況が見えてきた。

「前に会ったことがありますね」

「正解！ただ、勿論あなたは私のことを覚えていないと思いますよ。あなたは 1 人だったけど、私は大勢のなかの 1 人だったから」

マカーロフはようやく話の展開が読めた。

「まさか中学校？ 異文化理解授業？」

「正解！正解！何年だったか知りたい？」

「もちろん！もしかして 1992 年？」

「1990 年 10 月 21 日です！」

「なんてこった！」

北道を挟んで座る、ニキータ・マカーロフたちが馬鹿にしたように笑いながら両手を振っていた。

「丸 25 年か！ああ！信じられない！」

マカーロフは東京大学の大学院で勉強していた当時、毎週のように公立中学校に行って、生徒たちと直接コミュニケーションをしてい

た。異文化理解教育プログラムというのがはやってた時代で、彼は6年間くらいその活動をし、何百回も学校に足を運んだ。大学院修了後、外交官の道を選んで、ロシアに帰ることにしたマカーロフは、帰国の際、大きな不安を抱えていた。それは十分すぎるほど重荷になっていて、すっかり増えてしまった身の回りの荷物を抱える余裕はもう残っていなかった。日本で集めた様々な資料・書類のほとんど全てを捨ててしまった。確か371キロにもなった。その中には、中学校に行った時に子供たちからもらった感想文、手作り手紙、葉書、ポスター、折り紙も…

「そっかあ、私が作った団扇も捨てたね…」

「ごめん！全部捨ててしまった。たぶんすごく不安だったんだ。私はあのとき自分が正しい道を選んでいるのか悩んでいたんだ。自分の夢に向かって進めているのだから。本当は日本にもう少し残りたいかったんだ。だから新しい道に進むために過去のものを捨てずにいたら、重すぎると感じたんだと思う。痛すぎる。私は日本人じゃないから、懐かしいという気持ちは、いい思い出より、つらい気持ち。たまに古い写真とか葉書を取り出して楽しむタイプじゃないから。ごめん。でも、その時全部捨てる前に、全てのものに、あとそれをくれた人々に対して心からありがとうと言ったんだよ」

「そう…かあ、そっかだよ。ただ、ニキータの中で、私たちのクラスの印象とか、私のことどれくらい記憶に残っているかなと思ったの。だって、あの授業の時にあなたが言った言葉、私は全部覚えているから。全部」

「ほ、本当？そんな…」

2人は、すでにあらゆる代表団としての立場を忘れ去ったばかりか、常識的な範囲での儀礼さえ気にしなくなっている、とマカーロフはやっと意識したが、もはや物事の自然的流れに逆らう力がなかった。いや、もしかして、その気持ちになかったのかもしれない。このときマカーロフは、「外相」、「男」、「人間」、そういった自分を構成する様々な要素を制御するのをやめた。

「授業の時に先生たちが写真を撮ってくれることがよくあったけど、北…北海道さんのクラスでは？」

「たしかなかったな。写真撮らなかった。先生はいたけど、そういう授業にそんなに興味を表さなかったみたい」

「残念、学校に行ったときの写真がちょっと残っていると思うけど」

「ニキータは教室に入って、ああ、ごめんなさい。ニキータって呼んでもいい？その時私たちにとってあなたはニキータだったから。マカーロフではなかったでしょ」

「今でもニキータですよ。生まれてからずっとニキータ。いまや50年間ニキータ。大丈夫です」

「やっぱりそれも言ったね。そう、教室に入って、皆がまだざわざわしている間に、黒板に大きな漢字で『一期一会』と書いて、みんなの方を向いた。でも何も言わない。『一期一会』という超説教くさい言葉を見て、私たちはもっと盛り上がってきた。そのときにあなたは歌いかけた。ロシア語で」

「確かに歌ったね。自分としては上手く歌ったと思います」

「私もはじめはそう思ったけど。クラスは静まりかえて、あなたの歌だけが聞こえた。初めて聞く言葉だった。けど歌が突然終わって、皆どうすればいいのか分からなくてね、沈黙を守っていた。先生も困り果ててた。それであなたは…」

「思い出した！思い出した！あなたの学校とあなたのクラスのことを思い出した！その時私は『国歌じゃないからリラックスしていいし、拍手してもかまいません』と言った。赤竹中学校だ！ね！ねえ！」

北道は自分の椅子から飛び上がった。彼女の目から涙がぼろぼろ溢れ出ている。マカーロフも、テーブルを叩いて飛び上がった。

「すごい。どうやって思い出したの？」

2 人の間の唯一の境となっていた長いテーブル。

「どうって、もちろん私は学校に行くたびに、同じような話を同じパターンでやるけど、同じと言ってもね、クラスの雰囲気とか自分の調子によって細かいことで変化を加えたから。だから、実は、同じ話を 2 回やったことがない。だから、ちょっとがんばれば、それぞれのクラスや授業を思い出せるかも。ね、『一期一会』ですよ！私は授業の終わりに歌うことが多かったけど、あの日は『一期一会』という話に入る前に歌いたくなかったんだ」

「どうして？」

「分からない。自分の気持ちに従っただけ。どうだった？」

「多分、皆すごくびっくりした。でも、本当に上手に歌ってくれたので、感動したなあ。その雰囲気の中で、初めて聞くニキータの日本語。『拍手しても…』って。でもでも！拍手じゃ

なくって、握手と言ったよね！」

「そうだそうだ！私はいつも間違ってた！いまでもよく間違える。ゆっくり考えないと間違える」

「それを説明してくれて、みんなが安心して、まず、拍手して、後は、握手ね。私とも握手してくれた」

「本当？うん、多分皆にしたね」

「その後は、すぐにニキータのかわいいアクセントで『私は日本語でちょっとしゃべるんですが、外国人ですから、どんなにがんばっても完璧で、みなさんと同じように話せません。だから、間違いいっぱいします。変な間違いも。何とかお許してください』と言ったよね。みんなも『はああい』と納得してたよ。」

2 人が飛び上がったところからやっと落ちて着いて、北道の嬉し涙も、喜びの微笑みに吸い込まれた。

彼女はリモコンでクーラーを消して、重いビロードのカーテンを引くと、窓を開けた。外は夕暮れどき目前。クーラーが残した冷たい空気が、竹森の方へ流れていった。庭から植物の香りとヒグラシの鳴き声がしみ込んできた。

油蟬の後は、ヒグラシの音の美しさが際立っているとマカーロフは思った。

北道は窓の外をのぞいた。正装の紳士たちは草地の方々に散っていた。遠くに見えた竹森に石から石へ飛び移っている人の姿が見える。

しかし、次の瞬間に全員が無言のまま屋敷の 3 階の窓に目をこらした。北道は彼らに対して手を振った。

「マカーロフさんも少し挨拶してくれませんか

か？」

白い広間の多くの鏡には、再び大国の外相の姿が映った。マカーロフは長いテーブルを回って、北道のそばに立った。下に集まった全員の目の中には同じ質問が現れた。

「もう、もう少し、ヒグラシの音をお楽しみください」

窓を閉め、電気をつけた。今度は2人並んで座っている。

「今日、私たちがここで会ったのは当然のことですか？不思議ではないですか？どう思いますか？って」

「そう。その質問いつもするようにしてた。いつも反応が違うんだ。私自身にとっても、その質問は大事な方法だった。私は、学校に行くことに慣れてしまうことがあって、だから、今日は本当に何のために来たの？はっきり意識してる？真実が見えなくなっていない？ってその質問で確かめるんだ」

「私は、自分の人生の1時間を皆さんと一緒に過ごします。私の人生の1時間がこの教室の中で過ぎていく。その後、教室を出てさようなら、です。もう二度と会わない。会えると嬉しいけど、その可能性が非常に低い。だから一度しかないこの出会いをできるかぎり大事にしたいです。私たちはみんなお互いに影響を与えたりします。この先もずっと。



私には、いいところとよくないところがあります。でもこうした授業の時間は短いので、みなさんによくないところを見せたり、悪い影響を与えたりするには、あまりに時間が限られているかもしれません。勿論できるかぎりいいこと、いいものをみなさんに伝えたい。将来は非常に予想しにくいものだから、今日の私たちの出会いは、もしかして、将来別の誰かの人生に大きな影響を与えたり、誰かの運命を変えてしまうかもしれない。あるいは、私からの影響ではなくて、みなさんからの影響、誰かからの何かが、私の将来を変えることもある。それを予想できないから大事にします。今日のあなたたちと話せるチャンス、一つしかない出会いを大事にします」

北道は一息を入れた。

「合ってる？」

「すごい！そんなに覚えているの！」

マカーロフは感動を隠せなかった。

「これがあなたが言う『一期一会』だったね！今でも同じように考えているの？何か変わった？この話と一緒に『毎日新ニキータになる』と言ってたでしょ。毎朝起きてから、色々な人と出会って、知識を伝えたり、もらったりして、夜寝る前には、もう新しいニキータになるって」

「それは今でも変わらない。今でもそう思ってる。25年の間いろいろあったけど、すべての経験を思い返してみたら、やっぱりそうだ。基本は変わらない。一つの出会いで将来が変わるかもしれない。どう思いますか？いや、あの授業の時受けた感じと、今の感じはどうですか？」

北道は何かを思い立ったのか（あるいは何

でもなかったのか) 向こうの鏡に写った自分の姿に手を振った。

「ニキータの言葉は私の心に刻まれてるよ。その『一期』に関することだけではなくて、あの時言った言葉、すべて。高校受験の前の私はニキータの言葉から強い影響を受けたよ。私だけじゃない。そういう人がいっぱいいた。実はね、卒業後も中学校の仲間たちと3か月1回会っているんだ。みんな立派な大人になったよ。会うたびに、ニキータの話になる。みんな毎日学校で会ってたけど、実はその出会いはそれぞれ違って、同じじゃない。今日会っても、明日絶対会えるとはかぎらない。今日人を傷つけたら、明日その結果を修復する機会が必ずしもあるわけではない。あなたのおかげで分かって、みんなそれを25年間守っている。いや、守るというより、自分の周りに伝えているのです」

「そんな…」

その言葉を聞いてマカーロフは明らかに大きなショックを受けていた。

「私が言ったことがそんなに影響を与えるとは思わなかった。自信もなかったね。でも、本当に、本当に言いたかったことをみんなに言ってただけです。一度しかないチャンスを使って。でもね、その時、よく先生たちと喧嘩したよ。何を、どうやって子供たちに教えるかということに関して。私は『教える』という言葉をやめて、『伝える』を使うことにしたんだ。人から伝えられたことを、ちょっとだけ自分の中で整理して、誰かに伝える。これだけです。『日本人の中学生は本当に子供で、難しい話、政治、戦争の話しないでね。』『ロシアの歌を歌うなら、皆が知っている曲を

歌うと、楽しむだろう。』とよく先生たちから教えられた。でもでも、待ってよ！先生！もう一回言います！私にはみんなと話せるチャンスは一度しかない！みんなが知っている曲を歌って、ロシア民族衣装を見せながらコザックダンスを踊ったら、楽しいけど、私は皆を喜ばせるためにそのクラスに来たわけじゃない。でしょ？刺激を与えるために来たんですよ。授業が終わって、さようならといって、皆すぐ私のことを忘れたんじゃない、なんにも意味がないよ」

「そうそう！『教える』ではなくって、『伝える』ってことね！『教える』だと、中学生はまだ子供で、何も分からないから、分かってほしい物事を段々教え込むという印象が強い。でも、思い出してみると、14、5歳の私たちは、絶対子供ではなかった。まあ、勿論、子供は子供なんだけど、もう色々分かるもんね。理解のために必要な機能は完全に揃っていると思う」

そう言い終わると、北海道は突然笑い出した。彼女の気持ちが転換したのが分かった。憤りから陽気へ。そしてこう続けた。

「ごめんごめん！今思い出したの。どうしてニキータがクラスに入った時に、皆がざわざわしていたか。あなたは日本の羽織袴を着て来たんだ。ロシア人なのに。おかしかったわあ！でも歌の後でようやく皆が慣れてきた。すごく似合っていたしね」

「これもあの日の特徴だったんだ。日本の着物を着て学校へ行くのは、あの時一回だけだった。その前は、ロシア民族衣装を着たけど、その後は、普通の服を着るようになったんだ」

「あそうだ！確か末永だったと思うけど、

話の途中で『あなたはロシア人なのに、どうして日本の着物を着ているの』という質問をして、あなたの答えは…」

「好きだから！」

マカーロフの目はいたずらっぽく輝いていた。

「そうそう！あの時うちの先生は椅子からずり落ちちゃって。すごく楽しかったよ！」

「でもでも、その後すぐ、真面目な話もしたでしょ。ロシア人だからロシアの民族衣装を好きじゃないといけない、というわけじゃない。ロシアで一回でも着たことがないロシアの民族衣装を、どうして日本に来たからといって着ないといけないのか。勿論いろんなイベントでそうしたけど、ある日、その衣装は、残念ながら、私には何の関係もないと悟ってきた。だから無理して着ないことにしたんだ。自分で本当に好きになる時までね」

「で、じゃ、今はどう？好きになった？」

「私が日本の着物を好む理由は、その着物についていっぱい知っていたからだと分かったんだ。その歴史、着付けの仕方、紋の意味、どんなことでもいいから日本のことを一所懸命知ろうとしていた。だからこそ日本のことが好きになったんだと思う。日本全体を何回も旅行で回って、色々な人と出会って、毎日新ニキータになっていた。ある日、その日は民族衣装について悟った日からしばらく経ってからだったけど、気づいたんだ。『ちょっと、待てよ、待って！お前は、お前は、実はロシアについて何も知らないんじゃないか！？ロシアの中を旅行したことがないし、ロシアについての知識もほとんど全てがマスメディアからのもので、自分の目や心で見たものじゃ

ないじゃないか！』って。それが分かったときは何よりもショックだった。自分のふるさとのことも、自分の文化も、それどころか自分自身をぜんぜん知らないんだって」

「そう。その話もしてたっけ…」

「日本からロシアに戻って、3年間色々な地方を回って、様々な民族の人々と出会ったんだ。人々の考え方とか弱点とか、民族衣装の意味も、いろんなことが分かってきた。どんなことにも質問をいっぱいして、沢山の答えを見つけた」

「そ、それじゃ、ロシアの民族衣装を好きになった？時々着てる？」

マカーロフは明るく微笑んで、北海道の素敵な着物を見た。

「ロシアには民族衣装がいっぱいありますよ。農民のもの、商人のもの、貴族のもの、その他にもいっぱい。私は田舎に行くとき、農民の服を着ている。裸足で緑いっぱいの草原を風のように走るのが好きだから。雪の上も。でも、町にいるときは着ていないね。長いブーツは好きじゃないから」

2人の話は切れ間なく続いた…

「ね、あなたのいじわるな質問を覚えている？」

「日本という国には誰が住んでいますか？そして、ロシアという国には？」

「そうそう！それ！面白かったよ！色々な答えが出たね。一番皆が笑ったのは、『ロシアにはニキータが住んでるよ。』と井上が言ったら、恵美ちゃんが『ばか！ニキータは日本に住んでるじゃん！何見てんの！ここはロシア

じゃないんだから!』って叫んだ時ね。その時あなたは…」

「そう、簡単に言ってしまうと、日本では主に日本語を話す人が住んでいて、ロシアでは主にロシア語を話す人が住んでいる。人はお互いの言葉が分かればコミュニケーションもできる。お互いを理解したければ理解できるし、どんな問題があっても、解決できるって。そう言ったかな」

「お互いを理解したいと思えば理解できるし、どんな問題が起こっても解決できる」
北海道が繰り返した。

2 人の話が更に続いた。続いた。

ニキータ・マカーロフはあの授業の時と同じ歌を歌った。別の曲もまた。
「…」

ドアの外にがさがさいう音が聞えて、わざわざらしいノックの音。

「はあい？ 何でしょう？」「あのうう、おはようございます、お話中大変申し訳ございませんが、おはようございます」

「ああ。そうだ！なんてことだ。もう朝ですね」

「そうしたか。それではそろそろ本題に戻しましょうか」

<終>

(追記 1) この会談の 2 週間後、国後島では、日露間の北方領土問題に決着が付けられ、平和条約が結ばれた。その際、マカーロフは出席、北海道は欠席…

(追記 2) その更に 1 か月後の 10 月 25 日、平壤では、韓国と北朝鮮の統一条約が結ばれた。11 月 9 日すでに開放された 38 度線上で大規模なコンサートが開催された。その時、マカーロフは出席、北海道氏は出席…
ふたりは、再会？

クリコフ・マキシム (Mr. Maxim Klykov)

ロシア連邦出身

- ・2003 年、サンクト・ペテルブルグ国立文化芸術大学芸術学部、ロシア民族楽器科、ロシア民族楽器オーケストラの指揮を専攻、最優秀成績で卒業。楽器としてバラライカを中心。
- ・2004 年に文部省奨学金留学生として来日し、東京芸術大学音楽研究科で研究生として邦楽を研究する。
- ・2005 年 1 月第 11 回在日留学生音楽コンクール（東京）にてバラライカで演奏し、優秀賞。
- ・2008 年東京芸術大学音楽学専攻修士課程終了。『現代日本の学校教育における和楽器実技教育の可能性——箏を中心に——』という研究テーマで修士号取得。
- ・現在同大学音楽学専攻博士課程在学中。研究テーマは『琴古流尺八の伝承構造の研究』



メコンのほとりで..

二〇「最初の一雫」

源流に向かって出発する朝、必要な荷物をヤクに積み、慣れない馬でキャンプを出発したのは11時。なだらかな丘を越え、川を渡り、草原をひたすら進む。前方に山が確認される。そこから最初の一雫が流れだしているというのだけれど、すぐ近くに見える山にもかかわらず、なかなか距離が縮まらない。2時間ぐらいいして前方にテントが見えた。遊牧民の夏のキャンプ地だ。さらに同じように丘を越え、小川が流れている平らなところを見つけ、今日のキャンプ地と決めた。

翌日、3時間ぐらい進んだらうか、丘の頂上に小石を積みあげ神に祈る「オボ」があり、ここが分水嶺で目指す源流だという。しかし、水は流れていなかった。人跡未踏の地と思っていたら、こんなところにまでチベット人の足跡が見られた。源流とはいいながらチベット人にとって、日常の行動範囲内なのだと改めて認識させられた。それにしてもここまで来て最初の一雫を探せなかったらどうしようと思うと、不安になってきた。

ガイドが位置をкаえると、水があるかもしれないというので、さらに移動して

いくと、少しずつ緑が多くなってきた。先を歩いていたガイドが大急ぎで斜面を30メートルほどくだったと思ったら「水だっ！」と叫んだ。急いでそこまでおりると、緑の草の間からサラサラサラッと、



音楽を奏でるような淡い音色で水が流れているのではないか。「とうとう最初の一雫に辿りつけた」とほくはつぶやき、生まれ変わったかのような冷たい水を口に含んでみると、やわらかくて、甘い味がした。

メコンデルタを旅していたとき、源流

の一点を堰き止めたなら、この広大なメコンデルタも涸れるのだろうかと思った。そつと指を一点にあててみた。一瞬、流れが途切れた、ような気がした。

1時間ほどこうして源流で過ごした。天空に風が舞っていた。ひとつ大きく深呼吸すると、新鮮で冷たい空気が、胸のなかにすうーっと入っていくようで気持ちいい。

ふと川って何だろうと思った。古来、人々は川に沿って移動を繰り返した。いつしか集落ができ「市」が立った。やがて文化の花が咲き、川は人々の交流と生活を育み、喜びや悲しみの涙を呑み込みながら滔々と流れ、支流を巻き込み少しずつ川幅を広げていく。一步一步大人に成長していく、人の一生と重なっているような気がする。最初の一雫を手のひらにのせ、そんなことを考えたのだった。

〈写真〉 標高5千メートルの高原を、源流への道標を頼りに、息も絶え絶えに進むと、その先にメコンの最初の一雫があった。

※本連載は今回が最終回です。長い間ご愛読いただき、ありがとうございます。

かまざわきゅうや・・・(社)日本写真家協会(JPS)会員、駒澤女子大学非常勤講師

中国雲南省を中心にアジアを撮り続ける。近年はメコン川、長江など、川をテーマにそこに暮らす人々に焦点を当てている。「メコン街道」など写真展を多く開催。著書に『雲南最深部への旅』(めこん)、『メコン街道』(水曜社)等

日本語学校の夏季研修旅行で
(後列右端)



くれました。

また専門学校の先生は、私の気持ちを理解してくれた上で、CGは確かに下手だけれど、もっと時間をかければ他の才能が見えてくるかもしれない。2年生になれば、また新しいことを学ぶので、少しでも興味があるのなら諦めずにチャレンジしたほうが良いとアドバイスをくれました。

私自身も2年生からはじまる映像の勉強には興味があったので、それならあと1年がんばってみようと思い直したんです。

そしてその通り、2年生になって映像制作のことを学び始めると、徐々に授業が面白くなっていききました。面白いと作業にも集中して取り組み、良い作品を作ろうという意欲も生まれます。またその頃には先生の説明の聞き取りも問題がなくなり、クラスメートとも自然に付き合えるようになっていました。

私の卒業作品はショートムービーでした。絵コンテを描いて、セリフを決

めて撮影をはじめます。ストーリーは2人の男がカメラで、自分は撮られないように相手を撮る、という男2人のバトルです(笑)。これだけ聞くと「それだけ？」と言われてしまいうのですが、作品の中にいろいろな演出を入れたので、面白くなったと思います。クラスで全員の卒業作品を見終わった後、先生も生徒も僕の作品が一番好きだと言ってくれました。それは日本に来て本当に嬉しかった瞬間です。誰にでも苦手なことはあるけれど得意なことも必ずある。それを見つければ時間はかかり、我慢も必要だと言いうことですね。一つ言えるのは簡単に諦めてはダメだと言いうことです。

私は日本語に自信がなくてほかの学生とお喋りをする機会は少なかつたと思いますが、何かわからないうことがあると、みな親切丁寧に教えてくれました。みんな個性的で面白くて本当にいい連中で、専門学校に入ってから一番良かったのは、このクラスメートに出会えたことです。

今帰国を控えて残念なのは日本語が思ったように上達しなかつたということ。なぜそうなのか、自分でもわかりません。たぶん頭の回転が速くないからでしょう。後で部屋に帰ってゆっくり考えるところとスムーズに話せたのにと思うことが何度もありました。

また、自分は日本語が下手という思いから、相手に自分の日本語が通じないのではと不安になり、緊張して余計に日本語がうまく出てこなくなるのかもしれない。

今はまだ帰国して何をするか決まっていませんが、ただ一つ決まっているのは香港に帰っても日本語の勉強を続けたいということです。まだまだ勉強したいことがたくさんある。自分がこれで十分と思えるまで。一生日本語と付き合っていくことになりそうですね(笑)。

日本に来て少し生まれ変わったかなと思います。前よりも自信を持っていることは確かです。日本語以外は(笑)。

僕は日本でこんな悩みを抱えて生活をしていましたが、他の人もまた別のことで悩んでいます。でもそれ乗り越えて最後までがんばればいいことがあるかもしれない。苦しいこともあるけれど嬉しいこともある。悩みに苦しんだ分、喜びは大きくなる。日本では、これが人生なんだということを感じて学びました。



専門学校の撮影合宿で(3列目右端)

これが人生

劉思傑

Mr. LAU Sze Kit

〜中国（香港）

日本電子専門学校 CG映像科

卒業式では本当にうれしくて、友達と「とうとうここまで来たね」と握手をして喜び合いました。最後までがんばって本当に良かった……。

私が日本に関心を持ったきっかけは、多くの外国人同様に子供の頃に見た日本の漫画やアニメでした。日本語がわかったらもっとそれらを楽しめると思い、中学生の時には日本語塾にも通いました。

そして、大人になるにつれ、日本のドラマやゲームへの関心も高まり日本のポップカルチャー全般が好きになっていきました。

高校卒業後は就職をして仕事をしていたが、壁を相手にしたキャッチボールのように、同じことを繰り返す毎日に疑問を感じ、自分を変えたい、新しいことに挑戦したいという思いが強くなっていきました。

そして30歳を目前にした頃、日本留学を経験した友人からの勧めもあり、語学だけではなく、外国の文化や習慣を体験することで自分を変え



てみたいと、日本留学にチャレンジすることを決めました。

入学したABK日本語学校での生活は、素晴らしい先生方、クラスメートに恵まれて予想以上に楽しく充実したものでした。ところが1年の日本語学校生活が終わりに近づい

ても、私の日本語力は周りの人に比べて上達せず、このまま香港に帰ってしまっ

たら必ず後悔すると思いしました。また、好きな映像分野のこ

とを日本で学んでみたかったこともあり、専門学校に進学することにしました。

貯金は底を尽いていましたが、学費は家族に頼り、生活費はアルバイトでなんとかとなると考えていました。

ところが専門学校が始まって数か月した頃、

こんなはずではなかったという思いを強く持つようになりました。先生の話、クラスメートの会話がわからない。わからないから実習もうまく進まない。そのうち孤独感も深まり、自信がなくなっていました。

また好きなはずのCGもそれを作る作業は想像とは違い自分には難しく、どうしても思い通りにできません。デッサンなどの基礎的なことも下手で、自分にはこの分野の才能がないのではないか、このまま勉強を続けては学費の援助をしてくれている家族に申し訳ないと悩みました。

さらに生活のためのアルバイトも忙しく、学校が終わると毎日夜遅くまで働いていましたから、1年生が終わる頃には、体も気持ちも疲れ果てて、学校を止めることを真剣に考えました。

それを思い止まったのは家族と先生のアドバイスのおかげです。家族はまだ1年が過ぎただけ、苦勞をしているのはおまえだけじゃない、おまえがやる気なら私たちががんばると言っ



ABK 日本語学校生リレーインタビュー

わたしたち・・・だから日本に留学しました ⑦

★ 申 知芮さん ～韓国
(Ms.Shin Jiye)

——— 日本に留学をした理由を教えてくださいませんか？

日本語に興味を持ったのは日本製アニメや J-pop を好きになったからで、セリフや歌詞の意味を知りたくて、日本語の意味を調べはじめたことが始まりです。ただそれは作品や歌への興味といったもので、日本への興味とは違ったように思います。

日本という国に関心を持ったのは私が中学生の時です。日本に交換留学をしていた姉から日本のことをいろいろ聞いたことや、実際に姉の下を訪ねて日本に行き、日本をととても身近に感じるようになりました。

高校ではいろいろな科目を学びましたが、中でも私は生物の勉強が一番面白くて、この分野をもっと本格的に学んでみたいと思ったんです。日本を留学先にしたのは、日本が好きだったことはもちろん、この分野の研究では韓国よりも日本が進んでいると聞いたからです。

たくさんの日本語学校から ABK を選んだのは、姉がいろいろな学校を調べた中で、カリキュラムや進学指導が充実していることや、毎日テストがあって厳しく勉強を教えてくれるということなどから、大学に進学するのなら ABK がいいと勧めてくれたからです。

また、東京の日本語学校には韓国人が多く在籍しており、日本語を勉強しに来たのに韓国語ばかり話してなかなか上達しないという話をよく聞きます。ですから韓国人の割合が少ないということも ABK を選んだ大きな理由です。



——— 申さんは韓国人以外の友達が多いようですが、意識的にそうしているのですか？

そういうわけではないのですが、気付いてみたら友達は何の国の人ばかりになっていました(笑)。

もちろん韓国人が嫌いというわけでは無いのですが、他の国の人の中に親切な人や優しい人が多かったので、一度話してみてこの人はいい人だなと思い、それからよく話すようになり友達になっていったという感じです。

インドネシアやマレーシアなどから奨学金をもらって来ている人たちは、とてもお互いの繋がりが深く、一人と親しくなったら自然にその友達や後輩とも話すようになって、知り合いが増えていきました。

私は ABK に来て、韓国人とはあまり遊ばなかったのですが、それは日本語の上達や異文化を知ると言う面でもとてもメリットがあったと思っています。

——韓国とは文化の違う彼らと付き合ってみて、何か感じることはありましたか？

彼らと実際に付き合ってみると、たくさんのカルチャーショックがありました。例えば宗教面ですが、彼らはヒンドゥー教やイスラム教徒の人たちで信仰面で真面目な人が多いのですが、実際に付き合ってみると毎日のお祈りとか断食とか、生活の中に宗教がとても大きなウェイトをしましていると思いました。私なら好きな時間に好きなことをするという生活ですが、彼らはまず宗教があって自分があるという感じでしょうか。そして宗教的に真面目な人は人柄もすごくいいということを改めて実感しました。

韓国にいた時は、何がヒンドゥー教で何がイスラム教かということは私の中ではっきり区別できなかったのですが、実際に彼らと接して、いろいろ教えてもらう中で、そうした区別もはっきりとわかってきて、とても面白かったです。

——では逆に文化の違いから、付き合いが難しいと感じることはありませんでしたか？

私が付き合った人たちは優しい人ばかりだったので、生活の中で困ったことはありませんでした。ただ、クラスには中華系のマレーシア人が多いのですが、彼らは男女の話でとても進んだ会話をしているので驚きました。私は韓国の中でも小さい町に育ったので、良い意味でも悪い意味でも遅れていたのだと思いますが、高校時代ではありえない、顔が赤くなるような話を冗談のように普通にするので、私はちょっとその場に居づらい思いもしました。

——大学は九州に行かれるそうですね。

4月から鹿児島大学に進学することが決まりました。交換留学生だった姉を訪ねて来た、初めての日本旅行が鹿児島だったのですが、その時の印象がとても良くて鹿児島で勉強したいと思っていたんです。

東京は人が多くて窮屈、また人の性格も冷たいという印象があるのですが、鹿児島は人々が



修了式で先生、クラスメートと（後列右から2人目）

のんびりしていて優しいという印象があります。また物価も安くて生活もしやすいと思っています。

——専攻は何ですか？

農学部は獣医学科です。日本の獣医師の資格は韓国では使えないのですが、私は日本で働きたいと思っているので日本の国家資格をとればと考えています。

——大学では勉強以外に何か学びたいことはありますか？

ABKでは多くの外国人と出会い、いろいろなことを学びましたが、鹿児島ではたくさんの日本人の友達を作り、もっと日本のこと、日本人のことを知りたいと思っています。

——最後に、ABKに学んでいかがでしたか？

やはり韓国人が少ないということで、1日のほとんどを日本語を使って過ごせました。また、先生方もみな優しく進学指導をしっかりとやってくれますし、毎日のテストで自分の足りない部分がすぐにわかりますから、効率の良い勉強ができたと思います。

だから日本語を本気で学びたい、良い学校に進学したいと言う韓国の後輩には、ぜひABKを勧めたいと思います。

——ありがとうございました。良い日本で大学生活を送って下さい。



<日本留学に関する情報は JPSS で！ <http://www.jpss.jp/>>

しょうがくきんじょうほう 奨学金情報

■新宿区外国人留学生学習奨励費

対象：次の三つの条件全てにあてはまる方

- ①が在留資格が「留学」で、国費外国人留学生以外の方 ②新宿区内の大学院修士課程または博士課程、大学学部、短期大学の学科、専修学校の専門課程に1年以上在籍し、かつ、今後1年以上継続して在籍する見込みのあること ③新宿区に外国人登録し、区内に居住している方

募集人数：15名程度

給付金額：24万円/年

給付期間：1年間（4月から翌年3月）

応募：5月上旬に学校あてに案内および提出書類を送付。

募集期間：5月22日まで在籍する大学等の担当窓口へ提出

主催団体連絡先：新宿区地域文化部文化観光国際課 ☎ 03 (5273) 3504 FAX 03(3209)1500

■RSS在日アジア人留学生研究補助

対象：日本の大学・大学院またはそれに準ずる教育機関で学んでいるアジア諸国からの留学生（ただし国費留学生を除く）のうち、次のい

ずれかに該当する者 ①2010年4月1日現在

で、年齢が満30歳以上 ②研究生、大学日本語別科生 ③難民

給付金額：100,000円/年

給付期間：1年間（一括給付）

募集人数：若干名（09年度は10人）

応募：申込用紙を RASA ホームページ（下記）

からダウンロード

募集期間：5月12日消印有効

主催団体連絡先：〒162-0054 東京都新宿区河

田町7-14 イエズス会 社会司牧センター内

RASA 研究補助係

URL <http://rasa1.hp.infoseek.co.jp/>

■国際文化教育交流財団 生保スカラーシップ

対象：①指定大学（北海道、東北、筑波、埼玉、千葉、東京、一橋、東京外国語、東京工業、早

稲田、上智、慶應義塾、名古屋、京都、同志社、立命館、大阪、神戸、関西学院、九州）に在籍

するもの ②次のアジア諸国の国籍を有する者

→中国、香港、台湾、韓国、インドネシア、マレー

シア、タイ、シンガポール、ブルネイ、フィリ

ピン、ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマー、

スリランカ、バングラデシュ、モンゴル、ブー

タン、ネパール、インド、パキスタン ③2010
 年4月以降、他の奨学金を月額5万円以上受けない者

給付金額：5万円／月

給付期間：最長2年間

採用人数：14人

応募：締切4月頃（各大学の担当窓口にお問い合わせのこと）

主催団体連絡先：財団法人 国際文化教育交流財
 団 〒100-8188 東京都千代田区大手町1-3
 -2 （社）日本経済団体連合会内

☎ 03-6741-0162

E-mail : kokusaibunka@keidanren.or.jp

■大幸財団 留育英奨学金

対象：①愛知県内の大学に在学している留学生

②大学長（学部長）等所属長から推薦された者

③平成22年度に2年生以上の者

募集人数：10人

給付金額：40万円以内／年

給付期間：1年間（4月から翌年3月）

募集締切：4月21日

応募方法：大学の担当窓口相談

主催団体連絡先：〒461-0047 名古屋市中区

大幸南一丁目1番22号

☎ 052-721-1231 FAX 052-721-1233

Email: daiko-f@sf.starcat.ne.jp

イベント情報

2010年第1回 日本語能力試験 実施案内（国内）

日本語に関する知識とともに、実際に運用できる日本語能力を重視します。そのため、文字・語彙・文法といった言語知識と、その言語知識を利用してコミュニケーション上の課題を遂行する能力を測ります。レベルを現行試験4段階（1級、2級、3級、4級）から5段階（N1、N2、N3、N4、N5）に増やします。※「N」は「Nihongo（日本語）」、「New（新しい）」を表します。

<試験日> 2010年7月4日（日）

<受付期間> 2010年3月26日（金）～4月30日（金）（消印有効）

<受験票の送付> 2010年6月11日（金）（予定）

※願書付き受験案内は、2010年3月中旬から1部500円で全国主要書店にて販売予定

<詳細情報> http://www.jees.or.jp/jlpt/jlpt_guide_2010_1st.html

第51回「外国人による日本語弁論大会」出場者募集

<開催日> 2010年6月5日（土）13:00～

<会場> 新潟市民芸術文化会館「りゅーとぴあ」（☎ 025-224-5611）

＜応募資格＞ 次の1から3の条件を同時に満たす方

1. 母語が日本語以外である
2. 大会当日の年齢が満15歳以上である
3. 過去の本大会で外務大臣賞または文部科学大臣賞奨励賞を受賞していない

＜応募締切＞ 2010年4月13日（火） 17:00までに必着

＜応募方法＞ 出場希望者は、下記の1～4を郵送してください。

1. 所定の申込用紙
2. カセットテープまたはCDに録音した
3. スピーチ原稿およびそのコピー2部
4. 顔写真2枚

＜問合せ先＞ 財団法人国際教育振興会「外国人による日本語弁論大会事務局」

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-21

☎ 03-3359-9620 FAX 03-3353-8908 E-mail benron@nichibei.ac.jp

URL <http://www.nichibei.ac.jp/>

＜主催＞ 財団法人国際教育振興会、国際交流基金、新潟市

KANAGAWA CAREER EXPO 2010

日総ブレイン “外国人留学生・キャリアのための合同会社説明会”を開催します。「グローバルな経験・能力を活かしたい！」そんな方々の為に、グローバルな企業を集めた就職説明会です。学校・仕事が忙しい方も、ゆっくりと企業の担当者と話すことができる絶好のチャンスです。

＜開催日程＞ 2010年5月20日（木） 11:00 ～ 17:00

＜会場＞ 新都市ホール（横浜駅東口 横浜そごう9階）

＜参加対象者＞ 外国人留学生、外国人キャリア（一般学生も参加OK!）

＜詳細情報＞ <http://www.ryugakusei-job.com/index.html>

＜主催会社＞ 株式会社神奈川新聞社、日総ブレイン株式会社

お知らせ

東京都消費生活総合センターでは、英語、中国語、ハンデルによる外国語相談を始めました。品物を買ったり契約したりしたときのトラブルなど、消費生活の中で困っている外国の方がいらっしゃいましたらぜひご相談ください。

片言の日本語ができ、予約の日に来れる人。予約の日には外国語（英語、中国語、ハンデル）で相談できます。

＜連絡先＞ 東京都消費生活総合センター 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ16F
(JR、東京メトロ・都営地下鉄「飯田橋」駅すぐ)

☎ 03-3235-1155

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名 称：財団法人アジア学生文化協会

ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION

(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設 立：1957年（昭和32年）9月18日

故穂積五一氏創設

目 的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇主な事業◇

- (1) 留学生宿舍の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー、タイ語検定試験の開催
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友会との連携・協力

◇会費（年額）◇

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「月刊アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円（学生2千円）でお送りしています。

本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。

日本留学生活に必要な最新のニュースを
毎月届けます！

ABK留学生メールニュース

ビザ手続き関連情報 医療・保険情報

就職アルバイト情報 イベント情報

各種試験情報 奨学金情報

外国人相談情報 他

登録はWEBから

<http://www.jpss.jp>

月刊 **アジアの友** 2010年3月号

2010年3月10日発行（通刊第483号）

年間購読（送料共）3,000円（学生2,000円）1部 300円（税込）

発行人 小木曾 友

編集 月刊アジアの友編集部

発行所 財団法人 アジア学生文化協会

東京都文京区本駒込2-12-13（☎113-8642）

電話番号：03-3946-7565/4121 ファクシミリ：03-3946-7599

振替口座：00150-0-56754 E-mail: tomo@abk.or.jp

ホームページ：(<http://www.abk.or.jp/>)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-7565/4121 ☎+81-3-3946-7599

Email: tomo@abk.or.jp

Home Page: <http://www.abk.or.jp/>

「月刊アジアの友」の購読会員（年3,000円・学生2,000）にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。

私費外国人留学生のための 大学入学案内

2010年度版

私費外国人留学生のための 大学入学案内

日本留学試験のデータも充実
全国581大学・短期大学の入試のすべてがわかる
いきたい大学がすぐ探せる“学部・学科インデックス”

留学生の大学選びは

この一冊にお任せ下さい！

2010年度版好評発売中！

編集・発行：(財) アジア学生文化協会 発売：凡人社 ￥2,000 + 税

お問合せ：☎ 03-3946-7565 E-mail hoshi@abk.or.jp